

【認め合う心】

先日、この学校で生活する子どもたちの素敵だと感じるものの一つに、「自分と違った考えを持つ人や自分と違うことができる人、ときには自分ができることができない人のことを認め、大切にすることができる」ということがあるという話をしました。私は、そういうことが毎日の生活で意識できている子にそれが素晴らしいことであることと、多くの子どもたちにそういう気持ちを持ってほしいと願っていることを伝えたいと思いました。子どもたちの純粋な心はよいと思うことを素直に吸収し、それを実践しようと思います。私が伝えたいと思っていることがきっと伝わってくれると感じました。

子どもたちの世界でときどき起きるいじめと思われることも、実はこの「自分と違う人を認められない」ことが原因となっていることが多いように感じています。ちょっとした自分との違いを「おかしいんじゃないの?」「変じゃないの?」と感じ、その感情が軽率な言葉として発せられることがあります。このような人を傷つけてしまうような言葉遣いは子ども自身もともととしていたものではなく、それを抵抗なく口にしてしまう大人の影響で子どもの心に徐々に入り込んできてしまうものです。ですから、子どもの言葉遣いの問題や簡単に手が出るなどの暴力的な行動に対しては、保護者だけでなく大人が責任を持たなければなりません。さらに、意味のない子どもたちの比較は、子どもに「あなたはダメ、あの子はダメ」という気持ちを持たせてしまうという点で慎まなければならないことです。保護者の皆さんに子どもたちの生活環境をよくすることをお願いするだけでなく、私たち教員も自分が発する言葉の重みを考えながら日々の教育活動に取り組みなければなりません。

また、後期始業式では「意志・表現・感謝」の心について、さらに朝会では「寛容」について話しました。「広い心をもって友だちを受け入れる。とがめることをせず人へを許す。」これが子どもにとって難しいことであることは分かります。しかし、難しいからといって教えなくていいことではありません。今よりほんの少しでいいから、友だちのことを理解し、受け入れ、そして許すことができる広い心を持つ。そんな私の話、低学年の子どもたちもたくさん頷いてくれていました。上級生には、自分ができることは、自分がしなければならないことは何だろうと考えながら話を聞いてくれた子もいたようでした。私たちが社会で生きていくときに欠かすことのできない人と人との関わり、そしてつながりをよりよいものにしていくことができる力を子どもたちに身につけさせたいです。

【輝緑祭】

小学校の作品展を12月にしたことにより、中高の学園祭である輝緑祭をゆっくりと見学できるようになりました。小学生にとっての楽しみの一つは高2が担当する様々なお店のようです。自分で買ったお菓子を美味しくそうにニコニコしながら食べている姿をたくさん見かけました。その他の展示・発表を楽しみにしている子も多く、パンフレットを見ながら校舎内を歩いている子どもたちもたくさんいました。

私も、いくつかの展示会場に入りました。作品につけられた卒業生の名前を見ながら、作品を通してその子の今を想像していました。そこで出会った卒業生たちも声をかけてくれて私にとって楽しい時間になりました。

小学校に戻ると、この日を待って小学校を訪ねて来てくれる卒業生に会えます。この日ばかりは校長室は同窓会室になります。小学生の頃と同じように、気軽に職員室にいる先生たちに声をかけながら久しぶりの再会を楽しんでいました。

【発見】

子どもたちの成長を発見する。これはとてもよいこと、素敵なことですが、実はここに隠れた問題があります。教師が子どもたちの日々の活動を見て「こういうことができるようになったんだな」と子どもの新たな一面を発見することがあるのですが、本当にそれは新たな一面、本当にそのときに子どもができるようになったことなのかという問題です。実は、かなり前からできるようになっていたことを教師はずっと気づいていなかったのではないのかという見方もできます。私たちは、子どもの全てのことを知ることはできませんから、日々新たな発見があることはいいことです。しかし、子どもと話すとき、子どものことを話すとき、私は「ようやくこういうことができるようになりましたね」とは言いたくなく、「こういうところを見ることができました。こういう力を持っていることを知りました」と言うようにしたいです。いや、そういう表現をすることがよいことが多いのではないかと思うのです。教師が自分の目線で子どもを見るのではなく、子どもが日々の生活、時間の連続の中で活動し成長してきていることを意識することが大事です。子ども一人ひとりのことを知りたい、分かりたいという気持ちを大切に、謙虚な心で子どもに向き合うことで、子どもたちの今の姿をもっとありのままに見ることができるのではないかと考えます。私もこれまで通知表や多くのたよりなどで、自分から見た子どもたちの姿を保護者の皆さんに伝えてくる機会がありました。自分のこれまでを振り返り、これからの子どもたちの日々の暮らしを謙虚な心を持って見つめていきます。